

岡山作文の会会長賞

一年で一番〇〇だった日

美咲町立加美小学校

五年生 萩原愛子

二〇二三年十一月三日金曜日、この日は一年で一番疲れた一日だった。

父の実家は県北の蒜山高原で、夏はとうもろこし、春と夏は蒜山大根を作って道の駅に出荷をしている。普段は、祖父と祖母の二人で仕事をしているが、ゴールデンウィークやお盆、祝日など、道の駅にたくさん観光客が来る時期は、人手を借りて多く出荷している。

「まっすぐで、太くて長くて、真っ白な大根、めっちゃきれい。」

と、自まんそうに私に大根を見せた祖父に向かって言うと、祖父は、

「今年のはええのができたんで。」  
と、うれしそうに答えた。

実はこの秋の出荷の手伝いには、あまり乗り気ではなかった。春に大根の種を植えるのを手伝ったとき、三十メートル以上もある畑のうねに、一粒ずつ種を落とす作業をしたのが、とても大変だったからだ。何度こしをのばしてもまだまだ続くうね。こしは痛いし、時間はなかなかたたないし、農作業が好きになれなかった。

だから、朝早くに蒜山に向かう車の中でも、できれば行きたくないと思っていた。蒜山に着いて大根の洗い場に入ると、先に蒜山入りしていた父が、軽トラックに山のように積んだ大根を、寒い中なのに半そでで、頭から湯気を出して降ろしていた。厚着した祖父と叔父が無言でその大根を冷たい井戸水で洗い、祖母は手袋を何枚も重ねて大根の葉っぱを結束していた。

「愛ちゃん見てみい。この大根、愛ちゃんが植えてくれたところの大根で。」

と、祖父が見せてくれた大根を見て、私の中で何かが変わった。「私は何を手伝ったらええん。」  
と、自然に言葉が出た。

「愛ちゃんは、値段のシール貼りをお願いします。」

と祖母が言った。シール貼りは手袋がはめられず素手でしないといけない。手指が氷のように冷たくなる作業だが、なぜか頑張ろうと思えた。こんなに大きな大根をいくらで売るのが気になり、祖父に値段を聞くと、

「みんなに食べてほしいけえ、安く売る。百五十円くらいかな。」

と、祖父が答えた。母が、

「安っ。スーパーだったら二百円以上しようるで。」

と驚いた。私ももっと高く売れると言うと、

「愛子の好きな値段を貼ってみい。」

と言われた。

百本のシールを貼った後、父と私は軽トラックに乗って、道の駅に向かった。車の中で父は、値段を何円にしたかを聞いてきた。

「百六十円。その方がもうかるよな。」

と言うと、父は笑っていたが、

「百五十円で百本全部売れるのよ、百六十円で十本売れ残るの

とどっちがもうかる？」

と聞いてきた。私は苦手な暗算を一生けん命にした。確かに売れ残るとそんだ。私は全部売れるといいなと願った。

願っているうちに道の駅に到着した。第一駐車場も第二駐車場も車がいっぱいだ。祝日で観光客の方がたくさん蒜山高原の紅葉を見に来ていた。売り場の外にある生産者用の駐車場に軽トラックを停めると、荷台の周りをお客さんが囲んだ。まるでアイドルの周りをファンが囲むような感じだった。父がファンの対応をしているときに、私は売り場に向かって、

「大根が来ましたよ。」

と、できる限りの声を出した。売り場からどんどんお客さんが出てきて、私を追いこしていった。大根はどんどん荷台から消えていき、あっという間に完売した。

帰りの車の中、私の中から大変だから行きたくなかった、やりたくなかったという感情がほとんどなくなっていた。逆に、私が植えた大根が大きく育ったこと、飛ぶように売れたことに達成感を感じた。作業場に戻って、みんなで食べるお昼ご飯はとてもおいしく、祖父母に売れたときの様子を伝えると、とても喜んでくれた。

この日、蒜山に来た人が、買いやすいように値段を安くつけ

た祖父母の気持ち。手間と愛情をかけてよりおいしく、みずみずしく育つように作る姿。寒い中でも、作業を丁寧に精一杯やり切る様子から、仕事は、一生けん命、協力や分担をしながら、お客さんのことを思っていることが大事だということを学んだ。「おじいちゃん、おばあちゃん、毎日農作業お疲れ様。大切なことを教えてくれてありがとう。」

二〇二三年十一月三日。この日は一年で一番疲れた一日だった。

そして、一年で一番達成感を感じた一日だった。